

はなし かなだ き くない
噺は神田、聞いて紅。今こそ心元気に！

『海賊退治く笹野名槍伝より』

神田紅独演会

あの励ましを忘れない！
感謝を込めて語ります。

追悼特別企画

夏樹静子の『心はサスペンス』
心療内科を知らしめた「椅子が怖い」より



ミステリーの女王・夏樹静子氏は今年3月19日にご逝去されました。

新真打披露
かなだ もみじ
神田紅葉



平成28年 **10月27日** (木)

18:00開場 18:30開演

◆ところ／国立演芸場 (東京都千代田区隼町4-1)

◆席料／一般 4,000円 ※全席指定

お問い合わせ・申し込み先 (株) クロスポイント (平日 11:00~19:00) ☎03-3586-5020 〒107-0052 東京都港区赤坂2-8-13-701

協力: NPO法人 金印倶楽部 ☎092-737-5430 〒810-0021 福岡市中央区今泉1-10-21-901

【御挨拶】



台風による被害や熊本地震などが続き、日本列島にはいたる所に天変地異による爪あとが残されており、被災された方々には衷心よりお見舞い申し上げます。

今年の2月に弟子の陽司（53歳）が亡くなり、そのショックに追いつけぬように、ひと月後に夏樹静子先生の計報が飛び込んで来ました。

昨年秋に夕食を御馳走になり、わずか半年後には、美しい亡き顔にお目にかかるうとは夢にも思わず悲嘆にくれました。

順風満帆に見えた夏樹先生の人生の中にも、壮絶な腰痛に苦しめられた体験がありました。それは心因性によるもので、何よりも「心の健康」が大切なのだとも知りました。先生の人生を語ることで、人々を少しでも勇気づけることが出来ればと創作講演に致しました。

この秋真打昇進が決まった弟子の紅葉にも、病魔が襲いかかりました。しかし彼女は淡々と運命を受け入れることで、人生の晴れ舞台を華やかに飾ろうとしています。

紅葉の真打昇進披露もかねた今回の独演会に、是非お運び下さいますようお願い申し上げます。



夏樹静子先生と歓談中



講演師 **神田 紅**

夏樹静子氏が神田紅について書いた記事です。

作家 夏樹 静子

講演師・神田紅さんとは不思議な縁がある。私の夫が福岡の修猷館高校と早大商学部で彼女のずっと上の先輩、新講義出光佐三は夫の伯父の話だ。一方紅さんが文学座の女優を経て入門し、今日あるは師匠のお陰と仰ぐ二代目神田山陽の二女は、私に最初に長編小説を依頼して下さった編集者で、以来40年余りの知己である。2000年に山陽師匠が91歳で他界され、ご葬儀で私は初めて紅さんと会った。

1979年入門の神田紅は、同年本牧亭の初舞台がミュージカル講演「へんげるとぐれてる」という度胸で、「滝の白糸」や「高野聖」等の伝統的芝居講演もやれば、M・モンローやA・ヘップバーンの生涯を語り、人工衛星打上げには科学講演「ロケットの歴史」と次々新分野を開拓し、高度舞台、踊り、テレビ、CDと精力的な活躍が続く。

講演（談）は江戸初期の始まりと伝えられる。文化から天保（1804〜44）の全盛期には講演師800人で女流も生まれた。明治から「講演」になり、名人が輩出。「コロンス伝」等の翻訳物や時事講演も評判になった。大正から映画に押され、戦後は占領軍に禁止されて衰退した。

現在は東京の本牧亭などが講演を主にやる寄席（興行所）で、講演師は落語が主の寄席にも出演して場数を踏む。紅さんが入門した頃には数人だけだった女流が近年30人以上に増え、男女比が逆転している。

だが若い人はほとんど講演を知らない。講演から「日本語の持つ意味の深さやリズムの美しさを感じて欲しい」と紅さんは自伝に書いている。今や勇敢で発想柔軟な女流の方たちが、講演の新しい魅力を世に広げてほしいと、私も願っている。

演目

〈開口一番〉◆神田紅佳

◆神田紅

◆「海賊退治」笹野名槍伝より

後に槍の名人となる笹野権三郎義胤が「風早丸」に乗船して豊前小倉にゆく途中、瀬戸内海で海賊に出会ったときの活躍劇。師匠二代目神田山陽が得意としていた古典講演を、紅流に派手にアレンジを加えてみました。乞うご期待！

〈真打披露口上〉

◆神田紅・紅葉・蘭・真紅

◆神田紅葉

◆「了然尼」小泉八雲遺作

武田信玄の玄孫（孫の孫）に当たる総子は部でも評判の美しき才女。お仕えしていた東福門院様の崩御に後を追う覚悟でしたが思い直し、仏門に入る道を選びます。信念を貫き通した仏教界の女傑のお話。



神田紅葉
新真打
講演教室「紅塾」の生徒として講演を学んだ後2001年8月神田紅に弟子入り、日本講演協会前座となる。この時既に50才。2006年5月二ツ目。本年9月晴れて真打に昇進。長野県出身、子供3人孫4人。
「講演師・神田紅葉、我が人生に悔いなし！」

◆神田紅
「心はサスペンス」

◆夏樹静子著「椅子が怖い私の腰痛日記より」

心は深く、傷つきやすく、温かい。心が抱える闇と光は溶け合うことがないミステリーかもしれない。ミステリーの女王と称され、世界中にもファンを持つ福岡在住の作家・夏樹静子の心と体に起こったサスペンスとは……

日本経済新聞 2010年6月16日掲載

先の見えない、あの青春の日々から39年。芽の出ない日々、女だてらにとバカにされる日々、のどをつぶした日々、血を吐いた日々、それでも漸が好きだった。この世のことは、すべて人間が起こしたこと。ときに心を鬼にして、ときに心を仏にして、泣きながら、うめきながら、ほほえみながら、心をこめて語ります。